

俺はやたらに長い階段を上って地上に戻った。

空は青く晴れていた。日の眩しさに目がくらんだ。

わん、と元気よく吠えたのはシルベルだ。

シルベルは扉の外で律儀に待っていたのだ。

珍しく俺はシルベルをなでてやった。

町に変わった様子はなかった。つい先ほどまでこの町の地下に魔

王がいたとは誰も思うまい。

扉の近くには男が倒れていた。ここに侵入する際に出くわした白服一味だ。そういや、こいつのことを忘れていた。さて、こいつをどうしたもんか。単なる犯罪者として突き出しても、こいつは裁かれることはないだろう。王立の魔術学院の人間だ、身分だけはしっかりしているしな。

思案している最中にフィーネが起き出した。やれやれ呑気なもんだ。

フィーネはシルベルに俺に気づくと、不思議そうな顔をして、それから安心したような顔をした。

「大丈夫か、体はなんともないか？」

俺は訊いた。

フィーネはうなずくと、聞いて聞いて、と喋ってしゃべりだした。

フィーネは自分が誘拐されたとは気づいてないようだ。それより、町で見たものの珍しさに感激していて、それを早く誰かに伝えたいようだった。

「町って変わった人もいっぱいいるよねえ。頭がこーんな盛り上がりっぱっていたり、スカートもぶわーってなってる」

田舎暮らしだ。都会の着飾った人間はさぞかし奇妙に映ったことだろう。

「あ、あの人たちも変だあ〜」

フィーネは俺の背後を指差した。

「銀色の服、着てる。ピカピカしてる、凄〜い」

俺は振り返った。

天球儀の広場は、保護部で包囲されていた。

俺は両手を上げ、無抵抗の意思を示した。

ことここにいたっては、抵抗は文字通り、無駄な抵抗だった。

広場にいる保護士の数はおよそ二百。

派遣協会が抱える全ての保護士の内、およそ半分もの保護士が来るとは。

俺って大物だったんだな。いや俺じゃないか、イレミアスカ。

おどけてみようとしたが、駄目だった。

再び檻の中に戻される、その現実が俺の心を黒く塗り潰していた。胸の内はひどく苦い。そして、それはどんどん身体中に広がっていく。正直に言えば、絶望でその場にへたり込みたかったが、俺に残された最後のプライドがそれを許さなかった。

広場はすっかり保護部に包囲され、さらにその外側に野次馬の人だかりができていた。

保護部は包囲の輪を崩さず、中から六人の保護士がゆっくりと銃を構え、こちらに近づいてくる。

剣呑な雰囲気にはフィーネはわけもわからないまま、泣き出しそうにしていた。

俺は低く唸るシルベルを叱り、近づいてくる保護士に向き直った。保護士が二人、俺の脇を抱えるように左右から腕を取った。残り四人の保護士は、銃を俺に突きつけたままだ。幼いフィーネに配慮したのか、それとも最後の情けか、保護士たちはこの場でいきなり銃を撃って、俺の能力を封印するようなことはしなかった。

「おじちゃん、どこへくの」

はてさて可憐な少女になんと答えるべきか。

「待って、おじちゃん」

「こっちへ寄っては駄目だ」

保護士の一人がフィーネを制した。

「何で、どうして。おじちゃんが何か悪いことしたっていうの」
フィーネの声が俺の背を打った。

辺りはしんと静まりかえった。

「こいつ……、いや、この人はね、勇者なんだ。だから……」
保護士はフィーネを諭すようにいった。

フィーネの息を呑む気配が背中越しに伝わった。

このツヴァイテルに生きるもので、勇者の恐ろしさを知らないものはいない。それはほんの小さな子どもでも例外ではない。

「ほんと？ほんとなの？おじちゃん、ほんとに勇者なの!？」

泣きそうな声だった。

俺はそのまま声を見捨て、立ち去るべきだったかもしれない。

だが、俺はどうしたって勇者なんだ。自分を否定することはできない。

「そうだ。俺は、勇者だ」

俺はいった。

だが、やはりいうべきではなかった。

そのまま無視してればよかったんだ。

振り返った俺が見たのは、恐怖に怯えるフィーネだった。